

う。シベリアでは冬將軍、そして凍傷と恐ろしいことが身のまわりにいっぱい潜んでいました。

私共が元気で帰国できた理由にはいま一つ訳がありました。その理由とは、作業隊員は、シベリア抑留地の中でも一番過酷な所と言われたタイセット地区で生と死の狭間から生き延びた幸運なつわものどもばかりで、比較的若者が多かったからだと思っています。そして昭和二十三年十月十三日、待望の高砂丸で全員無事舞鶴市の平棧橋に上陸、帰国することができました。

不幸にも抑留中過酷な労働と飢餓と寒さや病魔のため犠牲となられ、今もなお凍土に眠る幾多の御霊に対し、「安らかに眠って下さい。二度と過ちを起こしませんから」と堅く誓います。

合掌

【執筆者の紹介】

昭和十八年九月 中野高等無線本科卒業
昭和二十年二月 滿州東安電信第七連隊

四月 〃 第四六連隊

六月 牡丹江へ移駐

八月 横道河子にて終戦

十月 入ソ。タイセット地区

昭和二十三年十月 復員

復員後は、好藤村農協等に勤務。

(愛媛県 山本 繁夫)

抑留生活を振り返って

愛媛県 菅 多喜雄

はじめに

昭和二十三年十一月一日に夢にまで見た祖国への帰還の第一歩をのりしてから既に五十年も経過しているし、三年有余のいまわしい抑留生活を私は人生最大の恥辱とも思っただけで、唯の一度も振り返ったり思い出してみたこともなかったもので、当時の記憶は遠く忘却のかなたに押し流されてしまっただけで、今では定かでない

い。

そのような状況のなかで手記を書くことは甚だおこがましいし、今さら恨みつらみを述べる気もないが、不当かつ苛酷な抑留の事実を後世に伝えたり若い世代に平和の尊さをアピールすることは私たちの責務と考え、あえて筆を執らせていただいた。

僅か十カ月の新婚生活

私は、旧通信省で通信のオペレーターとして勤めていた関係で、昭和十五年の二月に現役兵として旧満州国新京（現在の長春）の電信第三連隊に入隊を命ぜられたが、一年間の初年兵の訓練が終わると同時に、東軍司令部内の軍通信所で、東京の大本営や満州内各要所にあった軍通信所等との通信に携わってきた。

十七年十二月に軍務を終えてめでたく満期除隊はしたが、軍の強い要請によりそのまま軍属として残留し、軍務の遂行に当たってきた。

十九年十月にあらかじめ婚約していた現在の家内と結婚のため帰郷挙式、直ちに戦雲急を告げる玄界灘を渡って新京に帰った後、甘く楽しい新婚生活の日々を

送っていた。

しかし、その楽しかった新婚生活も、二十年八月九日のソ連軍の突然の侵攻によって夢破れ、軍人軍属の家族は、戦闘の足手まといにならぬようにとの配慮からか、着の身着のままではあったが南方に退避することとなり、僅か新婚十カ月後の八月十一日の朝、もう生きて再び会うことはないかもしれないという不安と焦燥のなか、家内とは別れ別れになった。帰国後知ったことであるが、家内達は、筆舌に尽くせない辛酸をなめながらも、幸い九月初めに無事帰国することができたのだった。

収容所に抑留されるまで

昭和二十年九月中旬のある日、武装解除されて丸裸となった私達の部隊（混成の約一千人）は、武装したソ連兵の厳重な監視のもと、新京のメインルート大同大街を一路駅に向かって行進させられた。

軍人軍属は近い将来日本へ送還してくれるそうだが、いや捕虜になってどこかへ連れて行かれるかもしれないなどの憶測が飛び交うなかでの連行であったの

で、みんなは不安と期待の交錯するまま黙々と行進を続けた。沿道では大勢の在留邦人も静かに見送られていたが、そのとき私の心をよぎったものは、これらの人達は我々のソ連兵による連行を「気の毒に今日もまた大勢の兵隊が捕虜になってどこかへ連れて行かれる」と同情してくれているのだろうか、あるいは「軍人軍属は我々よりも一足先に日本へ帰してもらえらうか」と羨望の念を持って見送っておられるのだろうか、ということであった。それはそれとして、今にして思えば、これが私の抑留生活の始まりであった。

我々を牛馬のようにすし詰めにした貨物列車はどんどん北上し、数日後には満州北端の黒河という町に着いた。

ここに着く途中の所々では大きな麻袋に入った高粱や大豆、豆粕等の食糧を列車に積載させられたが、終点の黒河では、案の定、これらの食糧を黒龍江の渡し船に積み込みさせられた。このような作業は私にとつては生まれて初めての大変辛い重労働であった。ま

た、ときには飢えを凌ぐため馬の飼料の豆粕をこっそりとかじって食べたこともあった。ともあれ、ソ連は満州内のあらゆる食糧や物資を根こそぎ略奪して搬入する気ではないのだろうか、またそれが満州侵攻の目的の一つでもあったのではないだろうかと思えた。

我々一行は黒龍江の対岸のブラゴエシチェンスクから再び貨物列車に乗せられて北上したが、暫くしてシベリア鉄道本線の、とある駅に到着した。みんなは、列車が帰国のためウラジオストックに向けて東に走るか、それとも捕虜として抑留するため西に走るかで色めき立った。しかし列車は無情にも西方に向けて走り出した。すると暫くして、「まっすぐには帰国しないで、少し西に行ったどこかで三、四カ月農作業等に従事した後、帰国するらしい」と、まことしやかな情報誰がからもなく流された。「まあ、仕方ないだろう」と、ある程度諦めたり樂觀もしているうちに、列車はバイカル湖を過ぎ、さらに西へ西へと数日間も走り続けた。あの情報は全くのデマだったと気が付いたが、

もう後の祭りであった。

列車は今度は、とある駅から南方へと走り続け、旧ソ連領カザフ共和国のバルハシという町に着いた。誰かが地図を持参していたのですぐ分かったことであるが、このバルハシ市は、四国と同じ面積くらいの非常に大きなバルハシ湖の北岸にある人口数万人の町で、ちょうどインドの真北（日本とは時差四時間）、緯度は北海道の最北端に位置する所である。この辺り一帯は、十数年前までは「死の砂漠」とも言われた不毛の地であったが、付近に世界有数の銅山が発見され、バルハシに精練所が設けられてから急速に発展した新興の町で、精練所の銅の生産高は日本全体のそれよりも多いということであった。

新京の出發日も、バルハシの到着日も、正確には記憶していないが、バルハシに着いたのは、新京を出發してから二週間ほどたった九月下旬のことであったと思う。既に暗くなりかけた頃収容所に着いた我々は、早速持ち物の検査を受けたが、大切に持参してきた写真や掛け替えのない携行品の一部を没収されてし

まったのは誠に無念で、私にとって最初の大きなショックであった。

収容所での苛酷な抑留生活

バルハシ市は、前述のとおり精練所の町であるとともに、まだ発展途上中の町であったので、我々が働かされた仕事も、ほとんどそれに関連するものばかりであった。すなわち、精練所内での様々な労役、銅精錬後の廃石処分場でのレールの敷設や移設、建築現場での穴掘りや資材の運搬その他の雑役、石炭や木材の倉庫からの荷降ろし、道路の穴掘り作業等。冬は、これらの作業のほかコチコチに凍結した糞尿処分の作業等、とにかく捕虜ならではの苛酷な肉体労働ばかりであった。これも日本の敗戦の結果でありやむを得ないのかと思いつながらも、奴隷同様の日々の生活には強い憤りを覚えると同時に、身の不運さをつくづくと嘆いたものであった。

冬は、北のシベリアほどではなかったと思うが、それでも連日零下二十度を超える酷寒が続いていた。気温が零下二十五度以下になれば作業は休むという一応

の基準があつたようではあるが、実際に休ませてくれた日は一度もなかつたように思う。

風を遮る何物もない砂漠では、北風のひどい日などは寒さが一段と厳しく、体感温度は優に零下四十度を超えていると思われるような日も度々あつた。与えられた被服だけでは寒さが凌げないので、みんな慣れぬ手付きでセメント袋の紙を使ってベストを作り着用するようにしたが、手足や顔が凍傷にかかる者もかなりいた。

また夏は夏で、砂漠地帯特有の焼け付くような炎天の下、全く身の置きどころもなく、毎日裸で作業をした。この辺りは雨が少ないのも大きな特徴であつた。たまにわか雨が降ることはあつたが、三年余りの抑留期間中に、雨のため作業が一日中休みになつた日は皆無であつたように思う。

ところで、私達新京軍通信所にいた軍属七、八人は、軍属の身分のままでは何かとやりにくいだろうという部隊長の計らいによって、収容所到着後暫くしてそれぞれの軍属の身分や軍歴によって全員軍人の階級

を与えられたが、私は、十七年十二月の満期除隊の少し前に伍長に任官していたので、軍曹の階級を与えられた。そして、その一年半後頃からは四十人程度の作業小隊の隊長を務めさせられていた。

二十三年の春頃だつたと思うが、私は、バルハシの収容所から数十キロほど離れた支所に、兵四十人ほどを引率して三カ月ほど分駐したことがあつた。

ある日のこと、私は日常の作業から帰って休む暇もなく急に石炭を貨車から降ろす作業を命ぜられ、夜の十二時頃にそれを終わって帰ってくると、今度はまた、朝までに木材を貨車から降ろさなければならぬので十人ほどをその作業に当たらせるように命ぜられた。就寝していた者をやっと起こして人選するとともに、私は隊長としての立場上再び現場に出かけたが、徹夜による睡眠不足と連続二十時間にも及ぶ長時間の作業の疲労とにより、作業が終了する直前に怪我をしたようなこともあつた。

次に、毎日の食料は重湯に毛が生えた程度のお粥に貧弱なおかずとスープだけで、堅い米飯は一度も食べ

たことがなかった。あるときなどは、三、四日間、収容所に全く一粒の米もなくなってしまうと、大豆や高粱等のお粥だけで飢えを凌いだことが抑留中二、三度もあった。

また、毎日昼食分として支給されるパンは、藁が半分ほど混じったお粗末な黒パンであったが、そのようなパンでさえ、月ごと、作業場ごとに課せられた厳しいノルマを達成できなかったときはろくに支給されなかつたため、一カ月間、昼食抜きで働いたことも何度かあった。

栄養失調になって痩せ衰えたりどんな風邪や腹痛、下痢等にかかっても、三七度六分以上の発熱がない限り作業を休ませてくれないため、体は次第に衰弱する一方であった。二十三年の夏頃だったか、私は栄養失調と疲労が重なって重度の黄疸（おうだん）になるし、虫歯がひどくなって食事もうくに取れないような状態になったので、もし今年中に帰国できなかつたら祖国に再び生きては帰れないだろうと覚悟したこともあった。

話は遡るが、二十年の暮れのある日、私たち軍属の同僚数人が祖国のクリスマスを偲んで少量のウオツカを飲んだところ、それを誰かに密告されて収容所内の営倉に二日ほど入れられたことがあった。凍てつく厳寒の営倉での夜は寒くてとても眠れるような状態ではなく、まさに地獄そのものであった。

その営倉入りが原因だったかと思うが、私は、十二年春のある晩、収容所の係官（日本語が堪能な朝鮮人）に呼び出され、「今後、収容所内の情報収集活動（つまりスパイ活動）を積極的に行い、定期的に報告すること、万一虚偽の報告をしたり職務を怠った場合は、いかなる処分を受けても異議はない」旨の誓約書を強制的に書かされた。

しかし私としては、どのような目に遭おうとも遠く離れた異郷の地で生死や苦楽を共にしている同胞を売るわけにはいかないので、そのまま放置していると、数カ月ごとに呼ばれては、なぜ報告しないのかと責められた。私は、その都度差し障りのない報告をしては何とかその場を繕い、難を逃れてきた。このような苦

い体験は恐らく他の人にはなかったものと思われるが、私にとってはどんな作業よりもなお辛い大きな精神的な苦痛であったとともに、呪縛に等しいものでもあった。私は何度も、もしかしたら祖国へ帰してもらえないのではないだろうかという不安に駆られたものであった。

ナホトカまでの帰還の列車の中でも係官に二度ほど呼び出されて執拗に尋問されたが、無事乗船した引揚船がナホトカの埠頭を離れたときほど、解放の喜びを感じ、安堵の胸を撫で下ろしたことはなかった。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正八年三月二十八日

出身地 愛媛県越智郡大三島町宮浦

軍歴 昭和十五年二月 新京電信三連隊入営

昭和十七年十二月 満期除隊、同日付

にて軍属拜命（新京関東軍司令部）

抑留地 旧ソ連カザフ共和国バルハシ收容所

復員 昭和二十三年十一月一日

職歴

入営により退職していた電電公社（当時通信省、現NTT）に復員後間もなく復職。

香川県観音寺電報電話局長等を歴任した後、昭和五十一年三月に退職。

その後、昭和五十八年八月まで、某株式会社で営業所長や取締役として勤務。

地域活動

昭和五十八年十二月から十二年間、民生・児童委員。昭和六十一年から現在まで老人クラブ会長。

平成元年から現在まで、松山市老人クラブ連合会の評議員や理事。過去三回にわたり町内会長、広報委員。

平成八年八月に、松山市で開催のシベリア抑留絵画、慰霊墓参写真展で実行委員会の副委員長兼事務局長。

平成九年十二月に建立の愛媛シベリア抑留者慰霊碑建立委員会には副委員長兼総務部長を担当する。現

在財団法人全国強制抑留者協会愛媛県支部副支部長

愛媛シベリアを語る会副会長

菅さんは高齢にはなられましたが、大変お元気で
す。平成八年夏に松山市にて、四国で初めての「シベ
リア抑留絵画、慰霊墓参写真展」を開催するにあた
り、大変御協力いただきました。

菅さんは、良い意味での「古武士」の姿を彷彿させ
る風貌と潔癖な性格は、我々の信頼の的です。晴天の
日は夏冬を問わず毎日午前中、ゲートボールに熱中
し、いつも寄り添うように横におられる美しい奥様
も、終戦時、混乱の北満、ハルビンで女の身一つで苦
しい体験を経て四年ぶりに無事帰国でき、再会するこ
とができました由。いつまでもお二人が仲良く、平和
で静かな老後を送ってくださいるようお祈り申し上げ
ます。

(愛媛県 山本 繁夫)

捕虜と黒パン

愛媛県 鹿島 智夫

満州最後の日

満州を去る最後の日であった、屠所の羊のように引
かれていた私達の目の前に突然川が現れた。「いよいよ
来たか」皆が口々に呟く。覚悟の身には些かの驚き
もない。近づくに従って川幅が広くなり、ロシアの岸
辺がかすんでいる。三キロくらいの幅であろうか、日
暮れになって夕日が沈むにつれ川は血の色に染まっ
た。悲劇に終わった満州をこの時程哀しく思ったこと
はなかった。神秘とも荘厳とも言いようのない真っ赤
な、そして大きな夕日であった。私の側に座っていた
滝田竜夫伍長が突然立って夕日を拝む。そして、「こ
れが満州最後の日だ、皆で拝もうではないか」。最後
を惜しむ気持ち皆にもあったのであるうか、一斉に
十人ばかりが立って夕日に手を合わす。